

平成20年に農業法人を設立し、農業生産と6次産業化に着手。「誰もが地元で安心して暮らし続けられる地域づくり」を目指して取り組む。現在では年間40万人以上が訪れる県内有数の観光スポット、また障害者・高齢者の活躍の場、更には地域の交流拠点として活躍。

## 基本情報

- 所在地:青森県おいらせ町
- 団体名:社会福祉法人誠友会工房あぐりの里
- 選定表彰:
  - ・平成22年度意欲溢れる攻めの農林水産業賞 優秀賞(主催:青森県)
  - ・平成27年度農林水産大臣賞交流促進部門(主催:(一財)都市農山漁村交流活性化機構)
  - ・令和2年度ディスカバー農山漁村の宝「コミュニティ部門」(主催:内閣官房、農林水産省)
  - ・ノウフク・アワード2021優秀賞
- 主力商品:小麦(もち姫)、菊芋、いちご、南国フルーツ等
- 取得認証等:認定農業者

## 取組の概要

- 工房あぐりの里では、障害者の就労する場として、新鮮な野菜や南国フルーツなどが栽培できる大規模なハウスや直売所、加工施設、レストラン、ほ場等が整備されており、土づくりから苗の植え付け、収穫作業、調理補助や加工作業、動物の世話など職種は多岐にわたっている。
- 一人一人が抱える症状にあわせて仕事内容を調整するなど、自らの能力とペースで仕事をこなし、達成感ややりがいを得ながら働いて頂けるよう、農業を含めた様々な職種の従事者が障害者と共に働き、支援・連携しながら作業を行っている。



熱帯ハウスのバナナ栽培



バリアフリーのいちご高設栽培



野菜加工施設



もち麦畑の見学会

## 体制図

【観光農園アグリの里おいらせ】

・株式会社アグリの里  
おいらせ(農業法人)  
・工房あぐりの里(福祉  
サービス事業所)  
・NPO法人平成謝恩会  
(地域貢献)



ふるさとの味研究会  
(高齢農業者団体)  
地元農業者  
地元公立高校

農作業委託・加工品の共同開発他

## 取組の成果

- 就労継続支援B型事業所の平均工賃は取組当初(平成22年)の16千円から、令和4年度には30千円に増加。
- 収穫された小麦は21店舗で取り扱われるようになり、関連商品も40種以上開発、販売されるようになった。
- 商品開発については、「ピクルス、ドレッシング、ふりかけ、漬物」などの新商品を開発。

所在地▶青森県上北郡おいらせ町向山東2丁目2-1684

連絡先▶TEL:0178-20-0670 E-mail:seiyuu18@kizakinosou.jp

ウェブサイト▶info@agurinosato.jp

# 【取組のプロセス】

平成19年

平成20年

平成25年

令和2年

令和5年

今後の  
展望

「観光農園アグリ  
の里おいらせ」を  
開設して、認定農  
業者を取得

(平成26年) 三重  
県障害者就農促進  
協議会と人的交流

令和2年農山漁村  
振興交付金を活用  
し野菜加工施設の  
整備

## きっかけ

「地域における障害者の活躍の場・雇用の場」を作りたいとの思いから、平成20年から本格的に農業生産と6次産業化に着手

### 作業所の設立

- 平成20年4月 アグリノ里作業所を設立。
- 平成21年8月 就労継続支援A型事業所「工房あぐりの里」を開設。
- 平成22年9月 就労継続支援B型事業所を開始。

### 「もち小麦普及委員会」を設立

- 休耕地の活用と農福連携による地域の取組として、もち性小麦(もち姫)の栽培に取り組む。
- 地元の生産者だけでなく、県民局、地元行政、野菜研究所、県立保健大学、福祉施設、加工業者等多くの方々と多様な連携を図りながら地域の取組として展開。
- 収穫された小麦は、地元を中心に普及を図り取扱店舗は21店舗、関連商品40種以上が商品開発・販売されるようになり、食材としても学校給食や福祉施設などで採用されるなど、地元地域の食材として定着。

### 「ふるさとの味研究会」との連携

- 町内で直売所を運営している、ふるさとの味研究会(高齢農業団体)と連携して菊芋の栽培と商品開発に取り組む。
- 商品開発については、地元の公立大学生と地域おこし協力隊等から協力・助言を頂き、「ピクルス、ドレッシング、ふりかけ、漬物」など全9種類の新商品を開発、合同で新商品の発表会を開催。それぞれの直売所で試験的に販売開始。

### 農福地域商工連携と所得向上への取組

- 商品開発では、「工房あぐりの里」利用者が生産した菊芋を、地元三沢商業高校と提携。機能性食品、地元特産品としての魅力を引き出し、おいしく楽しめるようにレシピ開発にも力を入れた。「販路拡大」として、地元学生とのテストマーケティングを兼ねた販売会を開催したほか、首都圏での出店や青森市、八戸市でのマルシェ出店などPR活動実施、営業体制を整えて販売した。

### 地域のつながり、業種の垣根を超えた交流・連携を通じて、地域活性化を目指す

- 今後、本格的に商品販売や新たな商品開発に取組、高齢農業者・障害者だけでなく、地域の様々な個人、団体と連携・交流しながら、地域の活性化につなげていきたい。



もち麦加工品の体験会



完成した野菜加工施設



菊芋の講習会



開発した商品



農作業(稲作)や木材加工、漁具の修繕など、農福・林福・水福連携に取り組み、県平均を上回る工賃を実現。

## 基本情報

- 所在地：青森県平内町
- 団体名：社会福祉法人  
青森県すこやか福祉事業団  
就労サポートセンターさつき
- 選定表彰：ノウフク・アワード2021  
チャレンジ賞
- 主力商品等：米、もち米、木材加工、  
漁具補修
- 取得認証



就労サポートセンターさつき（就労  
継続支援A型、B型、就労移行支援）

## 取組の概要

- 平成23年に10年以上休耕地となっていた水田の貸借契約を進め、利用者の就労の場の安定化や工賃向上を目指し水稻栽培事業を開始。
- 周辺地域の遊休林や敷地内外の伐採依頼を請け負うことにより、景観の保持や地域住民との信頼関係の構築につながっていると同時に、安定した作業と工賃確保の為、近隣の薪ストーブ販売店と提携し、薪材生産を実施。
- 漁業が地域における生活の要となっているが、高齢化や後継者不足による身体的負担が課題となっていた為、漁具修繕等の軽作業を請負う事で漁師の負担軽減と障害者の就労機会の確保を実現。



地域就農経験者を交えた農作業



遊休林伐採依頼の請負



ほたて漁具の修繕作業

## 体制図

青森県すこやか  
福祉事業団

就労サポートセンターさつき

(株) 城ヶ丘観光

(株) 魚国総本社

(株) ぐるめ

薪ストーブ wood rack

平内町漁業協同組合

A & T ひらないアグリ

## 取組の成果

- 地域の水田の90%以上を借入れ、事業所が地域農業の担い手となっている。
- 農作業に関わる障害者数は、取組当初の4名(平成24年)から21名(令和5年)に増加。
- 平均工賃月額は取組当初の14千円(平成24年)から29千円(令和5年)に上昇。

所在地 ▶ 青森県東津軽郡平内町大字茂浦字向田24

連絡先 ▶ TEL:017-755-5113

E-mail:saposen03@syuusapo.com

ウェブサイト ▶ www.syusapo.com

# 【取組のプロセス】

法人の設立

昭和51年

水稻栽培の開始

平成23年

平成24年

旧平内町立茂浦小学校校舎を借入れ「就労サポートセンターさつき」を開設

水稻栽培を引継ぐ

令和元年

薪材生産・販売を開始

令和5年

今後の展望

## きっかけ

地域の水田が10年以上休耕地となっており、景観保持の観点から稲作の再開を望む声が多くあげられていたことから農福連携の取組を開始

### 水稻栽培の開始〈平成23年4月〉

- 農業委員会、地権者との相談を重ねながら荒廃農地の貸借契約を進め「障害者総合福祉センターなつどもり\_林産班事業」として水稻栽培を開催。

### 漁具修繕等による漁具加工作業を開始〈平成24年4月〉

- 地域の漁業者及び漁業資材加工業者より漁具加工作業の請負を開始。

### 就労サポートセンターさつきを開設〈同年8月〉

- 就労サポートセンターさつき(就労移行支援・就労継続支援B型事業)を開設。
- 水稻栽培事業を引き継ぎ、農業を開始。
- 就業継続支援A型事業を開設〈平成27年4月〉(令和5年3月廃止)。
- 収穫期には地域住民を招待しながら大収穫祭を実施し、利用者と地域住民の交流を図る。
- 漁具修繕の請負や地域内海水浴場の清掃を続けることで、地元の漁師と利用者との関りが多く持たれるように工夫。

### 薪材の生産・販売を開始〈令和元年12月〉

- 青森県農福連携マルシェに参加し、利用者と共に生産した米と薪材を一般向けに販売



農福販売イベントでの薪材の販売

### 施設外就労開始〈令和5年8月〉

- 地元企業「A&Tひらないうぐり」から「青森きくらげ」生産行程の一部を請負い、農連携技術支援者育成研修を受講した職員の支援のもと、障害者が地域産業の担い手となっている。

### 障害者の「働きたい」を積極支援

- 豊かな自然の下、地域の伝統や産業と協調しながら地域活性化に貢献する事を目標として一丸となって取り組む。
- これからも変化には変化で対応し、小さな発想を大きく議論し合いながら全員が成長し、障害者の「働きたい」を積極的に支援。



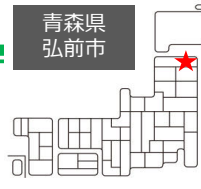
収穫米を使用した地域との交流  
(大収穫祭)



地域の海岸清掃



売れる喜びが作る喜びに



多機能型事業所「就労サポートひろさき」では、平成19年の開設以来知的障害などを持つ施設利用者が、主にりんご生産法人への施設外就労により、通年で栽培作業等を実施。

## 基本情報

- 所在地：青森県弘前市
- 団体名：社会福祉法人七峰会
- 選定表彰：－
- 主力商品：メロン
- 取得認証等：－



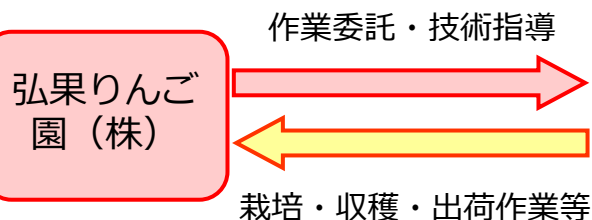
## 取組の概要

- 「弘果りんご園(株)」等から作業を請け負い、障害者が施設外就労でりんごの栽培を実施。また、障害者就業・生活支援センターからの紹介により、ピーマン等を生産する農家1か所からも作業を請け負っている。
- 障害者は葉摘みや収穫した果実の運搬作業、リンゴの箱詰作業、収穫用コンテナの洗浄のほか、比較的難度の高い1次摘果作業も実施。
- 弘果りんご園(株)の作業員から技術指導を受けるほか、障害者が市内りんご生産法人に実習生として通い、技術の向上を図っている。
- 令和4年からは弘前中央青果(株)と連携し、メロン栽培にも取り組む。



秋の収穫作業の様子

## 体制図



## 取組の成果

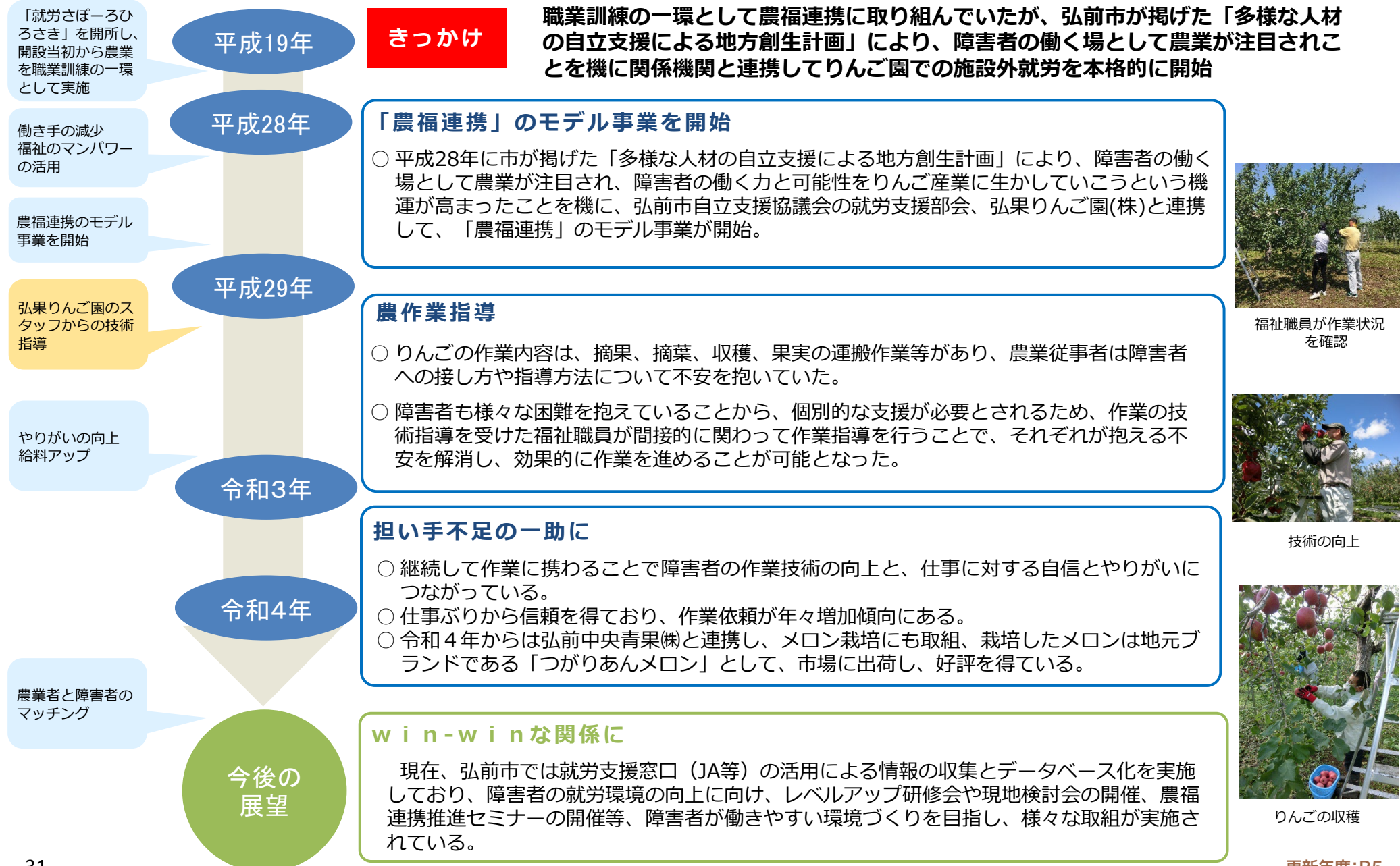
- 高齢化、人手不足等によりりんごの生産量低下や周年出荷への不安を抱えているが、多くの障害者が携わることで、地域における担い手となっている。
- 令和5年度は6名の利用者が実習先である弘果りんご園(株)でりんご栽培に取り組んでいる。
- 栽培したメロンは地元ブランドである「つがりあんメロン」として、市場に出荷し、好評を得ている。

所在地 ▶ 青森県弘前市熊嶋字亀田184番地1

連絡先 ▶ TEL:0172-82-5770 E-mail:support.h@xvb.biglobe.ne.jp

ウェブサイト ▶ <http://www.takushinkan.jp/1137.html>

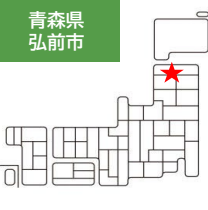
# 【取組のプロセス】



農業者と障害者等のマッチングに取り組み、独自のマニュアルや支援制度等を整備。不登校傾向等にある児童生徒や特別支援学校の生徒向けの農業体験も実施。

地方自治体

青森県  
弘前市



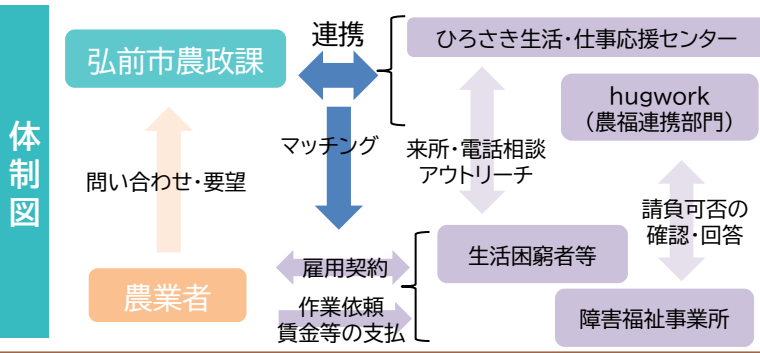
**基本情報**

農福連携取組開始: R元年  
取得認証等: SDGs未来都市

**概要**

**主力商品**  
(農作物)  
りんご、ピーマン、トマト、ミニトマト、落花生、えだまめ、にんにく

**特徴的な取組**  
中間支援



TEL/0172-40-7102 Mail/nousei@city.hirosaki.lg.jp

きっかけ

H31年

弘前市のりんご園で蔓延したりんご黒星病について、労働力不足に対応しきれなかった農家と福祉事業所が連携して対応したことがきっかけとなり、市として農福連携を後押し。

人を耕す

- 農業者から作業の留意点や細分化の内容を聞き取り、R5年度に独自の「農福連携実践マニュアル」を作成。りんご作業16項目について、農業者が作業依頼する際のアドバイス等を掲載したほか、作業細分化により、障害者が従事可能な作業を整理。
- 農作業に引率する支援員には、農作業の指示だけでなく、安全管理等が適切に行われるよう指導。

地域を耕す

- 農福連携の普及のため、市独自の支援制度として、R5年度から新たに農福連携に取り組む農業者を支援する「お試しノウフク」、障害者の農作業の様子や受入れの工夫を発信する「シェアノウフク」、特別支援学校の生徒に対する農作業体験を実施。
- R6年度からは新たに不登校傾向にある児童生徒に対する農作業体験を実施。

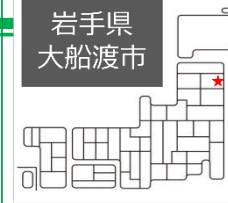
未来を耕す

- マニュアル作成などの取組が注目され、県内外からの行政関係者や大学等の視察が増加。併せて、県主催の研修会などに講師として招かれる機会も増加。
- 室内でりんごの袋掛けを練習できるキットを福祉事業者へ貸し出ししており、事前練習により心理的負担の軽減につながっていると好評を得ている。

成果

| 農作業に関わった障害者数                      | 農福連携の支援制度を活用した農家数  | 農福連携で実施した作物数        | 農福連携で実施した作業内容        |
|-----------------------------------|--------------------|---------------------|----------------------|
| 24人(R元)<br>→2,426人(R5)<br>※年間のべ人数 | 2人(R元)<br>→20人(R5) | 1種類(R元)<br>→7種類(R5) | 1作業(R元)<br>→31作業(R5) |

- 支援制度を活用して農福連携に取り組んだ農業者はのべ60名となり、事業終了後も短期雇用を継続しており、農家2戸が障害者計4名を常時雇用。
- 農福連携の推進により、障害者が作業しやすいよう、新たに加工用りんごのほ場を整備する農業者や、省力樹形である高密度植栽培を行うほ場での作業を依頼する農業者もいる。
- 市内農業者が市外の福祉事業者と連携するなど、地域外とのつながりを創出。
- 障害者がりんごの栽培からジュースのラベル貼り、販売まで携わるなど、6次産業化の事例も確認。



水産物の製造販売を実施している中で、それまで廃棄されていたホヤを障害者が加工することで商品化を実現。ホヤ以外の加工にもチャレンジするなど、障害者の活躍の場の創出や工賃向上に寄与しつつ、水産業及び福祉の課題解決に包括的に取り組む。

## 基本情報

- 所在地：岩手県大船渡市
- 団体名：三陸ラボラトリ株式会社
- 選定表彰：
  - ・ 令和2年：はなまき青年商工会議所主催  
SDGsアワード未来アイデア賞
  - ・ 令和2年：大船渡市ビジネスプラン  
コンテスト 奨励賞
  - ・ 令和4年：ノウフク・アワード2022  
チャレンジ賞
- 主力商品：むきホヤ、塩水ウニ、わかめ
- 取得認証等：－

## 取組の概要

- これまで廃棄されていた水産物等を買取り、障害者が加工して販売。商品のパッケージには障害のある作家の作品を利用。障害者の活躍の場を作り、工賃向上に取り組む。
- 雇用を1つ目のゴールと捉え、雇用を前提とした実習やトライアル雇用制度を活用して障害者にチャレンジする機会を提供。
- カキ、ウニ、ホタテ等も取り扱い、環境問題や再利用課題の解決に取り組む。



ホヤの殻むき作業



丁寧に関蔵を取る作業

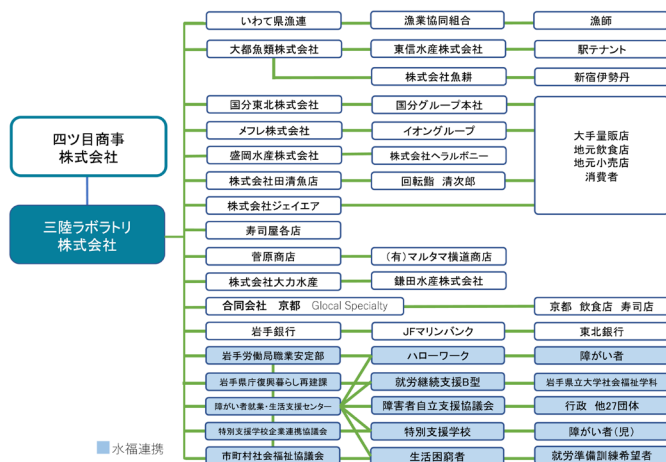


通販商品の様子



店頭に並ぶ商品

## 体制図



## 取組の成果

- 令和5年現在、障害者6名を雇用し、16名を施設外就労で受け入れ。
- 他漁協の規格外品も請け負うことで流通量が拡大、新たな産業モデルの可能性を圏域に提示することに成功。
- 売上は、取組当初（令和2年度）の446万円から、令和4年度には4,081万円に増加。
- 8～9割の作業を障害者が実施しており、障害者は地域にとって重要な担い手となっている。
- 水産連携のモデルとして、他の水産地域からアドバイスを求められる機会が増え、新たな連携が生まれている。

所在地 ▶ 岩手県大船渡市三陸町綾里港62-1

連絡先 ▶ TEL：0198-22-5149 E-mail：yotsume0925@outlook.jp

ウェブサイト ▶ <https://www.yotsume-holdings.com/>

# 【取組のプロセス】

## きっかけ

地域のホヤ業の担い手不足が深刻化していたことや、ホヤの多くは規格外品として破棄されていたことからその加工を障害者が担う水福連携に取り組む

平成23年

東日本大震災により養殖ホヤ産業に壊滅的被害

令和2年

三陸ラボラトリ株式会社設立

令和3年

廃棄分のホヤに着目。事業化

令和4年

水福連携の取組を開始

令和6年

水産缶詰、クラフトビール等新商品の開発

今後の展望

### 東日本大震災による被害と産業の担い手不足

- 平成26年には出荷体制が整ったものの、原発事故による各国の輸入規制により、生産量の6割のホヤを廃棄。
- ホヤの廃棄分、値下がり分についての産業補償がされるも令和3年に終了。
- 需要が不透明なため、ホヤ業の廃業が増加。地域における産業の継ぎ手、担い手不足が深刻化。

### 規格外品に着目。福祉就労との連携で商品化に成功

- ホヤは規格品を300Kg水揚げするために3000Kgの規格外品が発生していたが、それらは破棄されていた。そのため、破棄されていたホヤに着目し商品化に取り組む。
- ホヤの商品化のためには、1次加工で殻剥きが必要だが、この1次加工の担い手がない状況であったことから、福祉事業所との連携を検討し、地域の就労継続支援B型事業所からの施設外就労で障害者が1次加工に取り組む体制を構築し、規格外品の商品化を実現。併せて1次加工の担い手問題も解消し、障害者への工賃向上にも貢献。

### 取組の広がり

- 2年目からは、ホヤ同様に環境問題や再利用課題のあるカキ、ウニ、ホタテ、わかめ等にもチャレンジしている。
- 水福連携のモデルとして、他の水産地域からもアドバイスを求められる機会も増え、新たな連携が生まれている。
- 障害者就業・生活支援センターとハローワークとの連携、施設外就労からのステップアップという形で、雇用も実現。

### 水福連携の推進に着手

- 水福連携を広めるため、水産メーカーならではの悩みをサポートする事業を新たにスタートし、更なる水福連携の推進を図る。また、水産メーカーに限らず、農家や生産者にも連携の輪が広がつつある。
- 大手商社との連携により、サプライチェーンがより強固な形となり、販売力の強化にもつながっている。

### 水福連携の更なる推進

- 水産物の缶詰、加工品、クラフトビール等の商品開発が進行中。開発の中で、地域のデザイン企業や、デザインを扱うB型事業所との連携を進める。また、業務委託でシール貼りやアートデザイン利用等を通して更なる水福連携の推進を図る。
- 事業と人とのマッチングモデル事例として、人材育成コーディネートを行う事業体と連携し、地域の農林水産業に広報展開。



体験会・説明会の様子



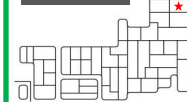
殻ホヤの出荷作業



ウニ詰め作業（高度な作業）



ウニ完成品



農業法人として葉物野菜の周年栽培を実施する中で、人手不足から施設外就労として地域の就労継続支援B型事業所に葉物野菜の栽培・調製作業を依頼することにより、経済活動と社会貢献の両立を実現。

### 基本情報

- 所在地：岩手県花巻市
- 団体名：株式会社耕野
- 選定表彰：－
- 主力商品：葉物野菜（ベビーリーフ etc.）
- 取得認証等：JGAP



### 取組の概要

- 平成24年2月に農業法人として設立し、温室ハウス内での水耕プラントを活用したベビーリーフ等の葉物野菜の周年栽培を開始し、飲食店向けの業務用葉物野菜を中心に生産。
- 岩手県主催の商談会において農福連携に取り組むことを勧められたことから取組を開始し、当初は簡単な収穫後の残渣回収などの作業委託をしていたが、今では播種、定植、収穫、計量、包装までの生産全般を障害者が担っており、貴重な人材となっている。
- 現在、農業等に関わっている雇用者又は利用者数は20名となっている。
- 専門家による「障害者特性」について学ぶ研修会を開催し、障害についての意識を深め、関わり方や接し方などについて理解を深めるなど、スタッフの意識付けに取り組む。



ホウワイトセルリの収穫と下葉処理の作業

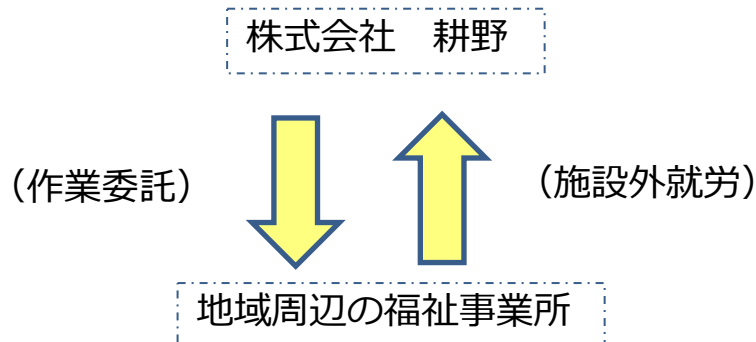


収穫後の残渣回収



メンテナンス作業

### 体制図



### 取組の成果

- 作業に余裕が出来たことにより、生産面積の拡大や、新品種の導入への研究開発の時間が確保でき、収益の向上につながっている。
- 障害者の視点に立った作業の見直しや、安全面での改善が図られたことで、従業員等の作業環境全般についても改善され、JGAPの維持管理にも好影響を与えている。
- 農福連携に取り組むことで、県や市町村主催の農福連携セミナーに講師として呼ばれ、福祉関係団体との交流や情報交換の機会が増えたことで、新たな連携が生まれている。

所在地▶岩手県花巻市太田64-184

連絡先▶TEL：0198-29-5558 E-mail：info@kouya-leaf.biz

ウェブサイト▶<https://kouya-leaf.biz/>

# 【取組のプロセス】

平成24年

きっかけ

株式会社耕野は働き手の確保を模索していた中、岩手県のマッチング商談会において農福連携を勧められたことから福祉事業所への作業委託を開始

株式会社耕野を設立し、起業開始

## 株式会社耕野を設立

- 平成24年2月に株式会社耕野を設立し、温室ハウス内での水耕プラントを活用したベビーリーフ等の葉物野菜の生産を開始。飲食店向けの業務用の葉物野菜を中心に生産拡大を図る。



野菜の種類により  
手作業での定植

平成25年

岩手県「食の産業  
クラスターネット  
ワーク」のマッチ  
ング商談会を活用

## ベビーリーフ等の周年生産を開始

- 平成25年3月に温室ハウス1号棟（12.72a+水耕プラント設備）を建設し、ベビーリーフ等の周年生産を開始。
- 平成28年4月に温室ハウス2・3・4号棟（15.84a×3棟）を建設。
- 平成31年1月JGAP（青果物）認証農場認定（登録番号030000006）



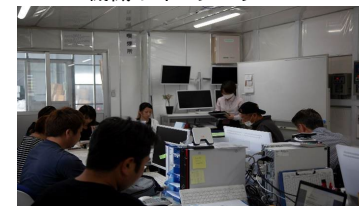
水耕栽培用の自動定植  
機械のオペレーター

平成31年

温室ハウス敷地に  
出入りする福祉事  
業所の名前が入っ  
た車両が地域への  
PRを担う

## 農福連携の取組を開始

- 岩手県主催の商談会にて、岩手県社会福祉協議会のコーディネーターから、水耕栽培は1年を通じた作業があることから、農福連携への取組を提案され、地域の福祉事業所から障害者の試験的な受け入れを開始。
- 社会福祉協議会や福祉事業所と定期的に会議を開催し、課題点、改善点を話し合ったことで、障害者を受け入れることへの不安が解消され、障害者が農業の働き手になると確信したため、本格的な作業委託を開始。

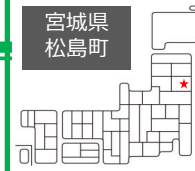


社内での障害者特性に  
ついての定期研修

今後の  
展望

## 経済活動と社会貢献の両立

- 様々な個性を持つ障害者に分かりやすいよう、今後は作業の平準化やマニュアル化を進めることにより、収益性と障害者の働きがいとを両立した労働環境整備や生活支援にも目を向けることで、農業生産性の向上と労働力の確保、定住人口の確保に繋げる。
- 日々、作業改善の連続であるが、障害特性に合わせた環境で淡々と作業を行うことができる障害者など、お互いの課題解決に近づける可能性を感じる。今後も地域の福祉事業所や関係機関との連携を図りながら、「農福」の連携に取り組む。



地域の農業法人と連携し、障害者一人一人に合った農業・漁業の就労機会を提供することによって、障害者が地域産業の重要な担い手として定着。

### 基本情報

- 所在地：宮城県松島町
- 団体名：一般社団法人松島のかぜ
- 選定表彰：ノウフク・アワード2020  
優秀賞
- 主力商品：生かき、水稻、さつまいも、かぼちゃ、トマト、きゅうり、なす、玉ねぎ 等
- 取得認証等：－



### 取組の概要

- 「一般社団法人松島のかぜ」は、就労継続支援A型事業所として、障害者が自立した社会生活を営むことが出来るように、一般就労に必要な知識や能力向上に必要な訓練を適正かつ効果的に行い、主に農業・漁業を通じた就労の機会を提供。
- 現在、身体・知的・精神障害を持つ17名（定員20名）は有限会社F・F磯崎が経営する農地（60ha）と牡蠣養殖場（むき身10tを生産）で就労。地域のベテラン農業者なども参加して障害者と共に農作業等を行っており、地域産業の重要な担い手として定着。
- 宮城県庁での産直販売会では、障害者が自ら育てた米や野菜、生牡蠣を対面販売するほか、地域のJ Aや漁協のイベントでの出店では、牡蠣ご飯や焼きハゼなどの調理販売も行う。



田植えの苗補給作業



きゅうりの袋詰め作業



農作業のあと、地域の方々と記念写真

### 体制図

一般社団法人  
松島のかぜ



有限会社  
F・F磯崎

業務委託

地域の中小企  
業、団体など



### 取組の成果

- 利用者が安定的な就労者となることで、地域の農業と漁業の産出額は震災以前のレベルに回復し、その再生に大きく貢献。
- 農業・漁業の他に配達作業などを通じて接客術も学んでおり、これまでに14名が一般就労に移行。
- 農業・漁業の年間を通じた作業により、1日4時間勤務ながら利用者は安定した賃金（月額7～8万円）を得ている。

所在地▶宮城県宮城郡松島町磯崎字釜12

連絡先▶TEL：022-352-3256 E-mail：matushimanokaze@gmail.com

ウェブサイト▶<https://matsushimanokaze.com>

平成25年

震災により、離農が続出し、半農半漁を生業としていた磯崎集落は、極端な労働力不足

きっかけ

震災後の農漁業復興のため、松島町と宮城県の指導を受けて設立

## 就労継続支援A型事業所として漁業法人に労力提供開始

- 東日本大震災により松島町内で働く障害者のほとんどが失業したこと、また震災をきっかけとした離農と労働力不足が背景となり、松島町と宮城県の指導を得て就労継続支援A型事業所として平成25年8月1日に設立し、利用者は農業法人である有限会社F・F磯崎が経営する農地や牡蠣養殖場で就労。



宮城県庁での産直販売

平成29年

優良な職業訓練の場として町内外に広く認知されている

## 一般就労への移行者、1人目が誕生

- 就労に必要な知識や能力向上に必要な訓練を適正かつ効果的に行い、一般就労への移行に向けて支援を実施した結果、平成29年4月に1名が一般就労に移行。
- また、近隣の閉鎖される就労継続支援A型事業所から5名を受け入れ。



ひとめぼれの精米袋詰め作業

令和5年

## 一般就労への移行者、14人目を達成

- 就労継続支援A型事業所を設立して10年が経過し、利用者は農業漁業の作業技術だけでなく、産直販売会やイベント出店、ホテル・旅館・飲食店への配達作業などを通じて接客も学んでいる。これまで14名を一般就労に送り出しており、優良な職業訓練の場として町内外に広く認知されている。



青森県への1泊研修旅行

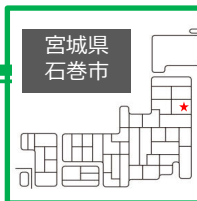
今後の展望

## 安心して楽しく健康的に働ける最高の環境作りに注力

- 農業と漁業のそれぞれの分野で年間を通して様々な仕事があるので、障害者の一人一人に合った仕事を提案している。
- 自分たちが作ったものがたくさんの人たちの食卓にならび、体をつくり、笑顔や命を支えているつながりを感じることができる。
- 連携しているF・F磯崎と共に、地域交流イベントに出店販売等で参加し、地域活性化に大きく貢献している。



仲間と働く感想を語る利用者



ソーシャルファームとして、社会的弱者や生きづらさを抱えている若者に対して農業による就労支援を実施するほか、農村留学プログラムによる自立支援等を実施。

## 基本情報

- 所在地：宮城県石巻市
- 団体名：一般社団法人イシノマキ・ファーム
- 選定表彰：
  - ・令和元年：第3回チャンピオン・オブ・チェンジ日本大賞入賞
  - ・令和2年：「新しい東北」復興・創成顕彰
  - ・令和4年：ノウフク・アワード2022 チャレンジ賞
  - ・令和5年：第10回ディスカバー農山漁村の宝 ビジネス・イノベーション部門に選定
- 主力商品：クラフトビール
- 取得認証等：企業在籍型職場適応援助者(ジョブコーチ)、農福連携技術支援者

## 取組の概要

- 津波被害等により増えていた休耕地でホップやさつまいもを栽培。「農業には人を動かす力がある」と感じ、心身の不調を抱える人の就労支援の場として農地を活用。シェアハウスを設置し、農村留学プログラムによる新規就農、定住を支援。
- 自社栽培ホップを使ったクラフトビールを製造・販売するほか、市内社会福祉法人と連携してホップソルト・干し芋を6次産業化商品として開発することで、農福連携による就労支援に貢献。



巻風ホップソルト



ホップ収穫イベント



ホップ畑  
(被災した耕作放棄地を転用)

## 体制図

### イシノマキ・ファーム法人本部

ソーシャルファーム部門  
(農福連携事業)

ホップ栽培・ISHINOMAKI HOP WORKS  
6次化事業(社会的弱者の雇用)

農業担い手センター

## 取組の成果

- ホップ苗株植えのボランティアイベント・収穫体験ツアー・企業研修には、平成29年から延べ1,100人以上が参加し、地域活性化に寄与。
- 6次化商品の売上は、約300万円(令和2年度)から約2千万円(令和4年度)に増加。農福連携推進のための作業マニュアルを整備し、雇用を創出。
- 中間的就労支援事業にはこれまで135名が参加。このうち8名が就労しており、3名はイシノマキ・ファームが直接雇用している。
- 農村留学プログラムでは、活動を通して知り合った地域の人々とゆるやかなつながりを持つことで参加者の円滑な社会参画に繋がっている。

所在地 ▶ 宮城県石巻市北上町女川字泉沢13番地

連絡先 ▶ TEL:0225-25-4144 E-mail:info@ishinomaki-farm.org

ウェブサイト ▶ <https://www.ishinomaki-farm.com/>

# 【取組のプロセス】

空き家を借りて事業準備をスタート

平成28年

きっかけ

被災者や不登校生徒、ひきこもりの状態にあった若者への農作業を通じた心のケア事業によって「農業は多様な人々に力を与えることができる」、「地域住民との関わりが自信を取り戻すきっかけとなる」ことを経験し、ソーシャルファームを理念とした農業の担い手育成事業をスタート

地域循環型による支援事業をスタート

平成29年

## 地域循環型による支援事業をスタート（ソーシャルファーム草創期）

- ソーシャルファームとしてのホップ栽培、野菜の生産による就労支援、地域住民参加のコミュニティづくりを実践。
- 中間的就労支援を実施。利用者が農作業を行う就労プログラムに参加し、訓練日当を受け取ることで、働くことに対するプラスの動機付けを行う。
- 6次産業化の取組の一環として「ISHINOMAKI HOP WORKS」を開業。クラフトビールの醸造を開始。
- 地域農家の手伝いを行い、短期アルバイトによる就労訓練を実施。



セリ収穫作業

農業担い手センター事業、シェアハウス整備、農業就職支援を実施

平成30年

## 社会的弱者の自立支援を含めた農業就職支援をスタート

- 農業担い手センター、空き家を利用したシェアハウスを整備。
- 農村留学プログラムを通じて、自立生活や農業を体験。一人暮らしの練習として、一時的に地方での就農体験を行う。



サツマイモ収穫作業

農福連携サポーター育成の取組をスタート

令和2年

## 農福連携サポーター養成事業をスタート

- 地域農業生産者が合理的配慮のもとに適切にかつ持続的な障害者雇用に繋げることができるよう、サポーターを育成。
- 将来的には農福連携技術支援者育成につながるよう取組を継続的に実施。
- 令和5年度からは、中間的就労支援事業から直接雇用に切り替えて支援を実施。



地域住民との農作業風景

ISHINOMAKI HOP WORKS をスタート

令和3年

ISHINOMAKI HOP WORKS ビアスタンドをスタート

令和6年

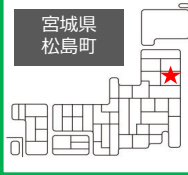
今後の展望

## 農業を通じて地域の力を活かし、誰もが共生できる社会を目指して

- あらゆる社会的弱者が、地域住民と一緒に対等の関係で働くこと、誰もが農を通じて豊かに暮らせる地域を目指しサポートしていく。
- 農業を通じた交流できる街づくり、ソーシャルファームの活動をととした地域循環型社会の構築を目指す。



令和5年2月ビアスタンド設立



地域の就労継続支援A型事業所と連携することで、障害者が地域と繋がりをもって働ける場を創出するとともに、安定した作業賃金確保や、一般就労への移行を支援しており、様々な地域活動にも参画することで地域の活性化にも寄与。

## 基本情報

- 所在地：宮城県松島町
- 団体名：有限会社 F・F磯崎
- 選定表彰：ノウフク・アワード2023 優秀賞
- 主力商品：生かき、水稻、さつまいも、かぼちゃ、トマト、きゅうり、なす、玉ねぎ 等
- 取得認証等：認定農業者



生かき



露地野菜ほ場

## 取組の概要

- 半農半漁が生業の松島町磯崎地区において、就労継続支援A型事業所「松島のかぜ」から約20名の利用者を受け入れ、約60haの農地で水稻やさつまいもの栽培、牡蠣養殖を実施。
- 地域の農協、漁協、中小企業からの委託業務を請け負い、「松島のかぜ」の利用者と受託先の従業員の協同作業などを実施している。
- 農産物の加工施設と利用者の休憩場を併せて整備し、農産物の付加価値向上と作業環境の改善を実施。
- 地域活動にも積極的に参加しており、酒屋・酒蔵・8つの旅館と連携した「特別純米酒いやま」の共同生産活動では、原料の「さつまいも」を酒蔵栽培し提供している。



畑の除草作業



整備した加工場



生かきの共同むき身作業



酒造りプロジェクト

## 体制図

農業法人  
有限会社 F・F磯崎

連携

一般社団法人 松島のかぜ  
(A型事業所)

企画運営班  
(企画、運営、事務処理 等)

水田農業班  
(水田農業の指導、管理 等)

畑作農業班  
(畑作農業の指導、管理 等)

農産加工班  
(農産物加工の指導、管理 等)



## 取組の成果

- 利用者が地域で働く環境を創出することで、農業・漁業の担い手確保及び経営の安定化に貢献し、地域産業の衰退の歯止めとなっている。
- 海上作業には手当を支給するなど、安定した作業賃金確保に努め、F・F磯崎から利用者に対し、月額平均4～5万円の賃金を支払っている。
- 特別純米酒の共同生産が縁で、各旅館から米、野菜、生かき等の直接受注を受けるようになり、経営の安定化につながっている。

所在地 ▶ 宮城県宮城郡松島町磯崎字磯崎101

連絡先 ▶ TEL:022-355-1136 E-mail：－

ウェブサイト ▶ <https://ffisozaki.jimdofree.com>

# 【取組のプロセス】

平成25年

農福連携の取組開始

きっかけ

高齢化が進み著しく農家数が減少する中で、東日本大震災による離農の増加と地域内の労働力不足に対応するため、就労継続支援A型事業所「松島のかぜ」と連携し農福連携の取組を開始

平成28年

復興基盤総合整備事業（H28～R2）

## 復興基盤整備を契機とした農福連携の取組拡大

- 平成28年度から令和2年度にかけて復興基盤整備事業の工事が実施され、地域内の震災で甚大な被害を受けた農地の大区画化と集積、集約が図られた。F・F磯崎は磯崎地区の大部分を耕作する地域の担い手となり、利用者の就業機会が拡大。



整備されたほ場で作業する利用者

令和2年

農山漁村振興交付金農福連携対策（R2～R3）

## 農山漁村振興交付金農福連携対策の活用

- 農福連携整備事業では、農産物加工場、休憩場所、トイレ等を整備し、利用者の就労環境が大幅に改善されるとともに、就労拡大も実現できる状態となった。
- 農福連携支援事業では、作業マニュアルの作成、農業生産・加工技術研修、先進地視察、地域交流会等を実施し、組織の一体感、生産活動への意欲が高まった。
- 様々な地域のイベントにも積極的に参加し、中心的な役割を担う。



農産物加工の研修

令和5年

農産物の6次産業化商品開発

## 取組の継続と発展

- 就労継続支援A型事業所利用者からの受け入れ人数は令和元年の15人から令和4年には22人に増加。利用者はこの期間に8名が一般就労に移行。
- 加工施設では、かぼちゃやさつまいものペーストを試作し、近隣の飲食施設等へ提供しており、今後は牡蠣やさつまいもなど加工品の商品化等も視野に取組の拡大を図る。



加工場とかぼちゃのペースト

今後の展望

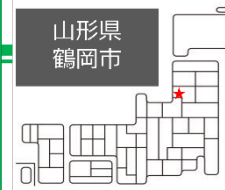
## 経営の安定と障害者の就労機会の確保を目指して

- 農産物加工品の開発、販路開拓等を進めて経営の安定を図り、最低賃金としていた障害者の賃金の更なる賃上げを目指す。
- 地域交流イベント等に積極的に参加し、障害者の地域との繋がりを創出するとともに、磯崎地区の活性化に寄与する。



地域イベントへの参加

更新年度：R5



多機能型事業所「作業所月山」では、知的障害者を中心とする施設利用者39名が、月山短角牛の飼育、県特産の「だだちゃ豆」及び果樹の栽培のほか、ジャム製造等の加工業にも取り組む。

### 基本情報

- 所在地：山形県鶴岡市
- 団体名：社会福祉法人 月山福祉会
- 選定表彰：ノウフク・アワード2022  
準グランプリ「未来を耕す」
- 主力商品：月山短角牛、だだちゃ豆、落花生、庄内柿等
- 取得認証等：－



### 取組の概要

- 令和2年度から庄内町所有牧場を指定管理者として借り受け、放置された放牧地を再生して無農薬の牧場に改良後、日本短角種55頭を放牧し国産粗飼料（牧草）のみで飼育。翌年5月から「完全国産牧草牛」として出荷を開始。
- 地域交流の一環として、作業所月山チャリティーショー等のイベントを継続して実施。
- 障害者は畜舎の清掃や給餌、農産物の種まきや収穫、等の作業を行っている。
- 約4haの畑と約3.3aのハウス2棟で、県特産「だだちゃ豆」、落花生、かぼちゃなどの野菜、庄内柿またブルーベリー、イチジク等を栽培しているほか、ジャム製造等への加工も実施。



短角牛の放牧の様子



短角牛の仔牛の世話



だだちゃ豆の農作業風景

### 体制図

社会福祉法人  
月山福祉会

多機能型事業所  
「作業所月山」

多機能型事業所  
「スローク新町」

放課後等デイサービス・タイムカ事業  
「アトリエ」

相談支援室  
「一柳」

### 取組の成果

- 就労継続支援B型事業所である作業所月山で働く利用者39名のうち農畜産部門で働く利用者は8名。農畜産部門以外の作業を行う利用者31名の平均工賃月額が21,000円であるのに対して、農畜産部門の8名は29,000円と高工賃を実現。
- 農畜産部門の利用者は取組当初の3名から8名に増加。農地面積は取組当初の148aから285aへと増加し、現在は短角牛55頭を飼育。
- 障害者が県の特産品である「だだちゃ豆」の生産に関わることで、県特産品の生産量の維持に貢献。

所在地 ▶ 山形県鶴岡市中野京田字吉柳4-1

連絡先 ▶ TEL:0235-24-8541 E-mail:ichiyana@sea.plala.or.jp

ウェブサイト ▶ <https://www.gassanhukusikai.com>

# 【取組のプロセス】

農家の高齢化による多くの荒廃農地

平成16年

きっかけ

高齢化による中山間地の衰退を憂い、地域の荒廃農地の再生に取り組むとともに、土や牛と触れ合うことによる障害者の情緒面での効果を狙い農福連携の取組を開始

平成23年

短角牛の肥育・繁殖農家の減少による仔牛の高騰

## 本格的な農畜産事業の開始

- 荒廃農地を借り入れ農作業を実施するとともに3,500万円を借り入れ中古牛舎を取得。
- 牧草だけで飼育できると聞いた岩手発祥の「日本短角牛」を買い付け。しかし岩手では配合飼料による飼育をしているとのことで、月山福祉会もそれに倣う。
- 繁殖・肥育一貫経営の開始。



短角牛の仔牛の世話

平成29年

消費者の食への安全・健康志向の高まり

## 飼育方法の転換

- 配合飼料による慣行的な飼育ではなく、牧草だけの飼育にこそ短角牛の価値が生まれると気付く。
- 同じく牧草のみで短角牛を飼育する北里大学獣医学部「八雲農場」に飼育全般に関する指導をしてもらうとともに、短角牛による放置された牧場の再生と肉質に関する共同研究を開始。



短角牛の仔牛の世話

令和元年

クラウドファンディングの活用

## 大きな夢への挑戦

- クラウドファンディングを活用し、牧場経営に最低限必要な機材の購入費1,200万円を調達。
- 放置されていた44haの庄内町所有の牧場を指定管理者として借り受ける。
- 青果市場へ野菜の出荷を開始。（長ねぎ・にんじん・かぼちゃ）
- 令和3年にはスターゼンミートプロセッサー（株）に完全国産牧草牛の価値とそのおいしさを理解してもらい、取引が開始。
- 現在の飼育頭数は55頭。



短角牛の放牧の様子

今後の展望

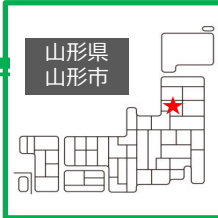
放牧農家減少による公営放牧場の放置

## 工賃向上で利用者の自立した生活を

- 一貫経営で出荷頭数を徐々に増やし、短角牛150頭飼育、年間出荷頭数70頭、年間出荷額5,000万円を目指す。
- 「有機JAS認定牛」の認定取得を目指して、短角牛の付加価値を上げていく。
- 障害者と共に完全国産牧草を使用した短角牛を育て、その収益で工賃を53,000円に向上させ、障害者年金と合わせて113,000円を確保することで、利用者が自立した生活が出来るようにすることが最終目標。



月山福祉会と北里大学との共同現地調査の様子



降雪地帯の条件不利地において農福連携を実施し、山形伝統野菜の生産・加工など、高付加価値商品の生産を行うことで、障害者の就労機会の確保、賃金・工賃の向上等を実現。

## 基本情報

- 所在地：山形県山形市
- 団体名：有限会社内外ファーム  
蔵王の恵農場
- 選定表彰：－
- 主力商品：パプリカ、青菜、チョロギ、赤根ほうれんそう、凍み大根 etc.
- 取得認証等：認定農業者



## 取組の概要

- 平成18年に有限会社内外ファームを設立し、標高600mに位置する「蔵王の恵農場」で、高原野菜の栽培を開始。その後、就労継続支援A型事業所及び、B型事業所を設立。
- 就労継続支援A型事業所では、利用者14名を雇用し、農作業の全てを障害者が実施しており、山形伝統野菜の生産・加工を行うなど地域資源の維持に貢献。
- 就労継続支援B型事業所は、地域全体が高齢化や人口減少で労働力の確保が困難な中、地域周辺農家の作業受託を行うなど荒廃農地の発生防止にも貢献。



特産野菜の原料生産



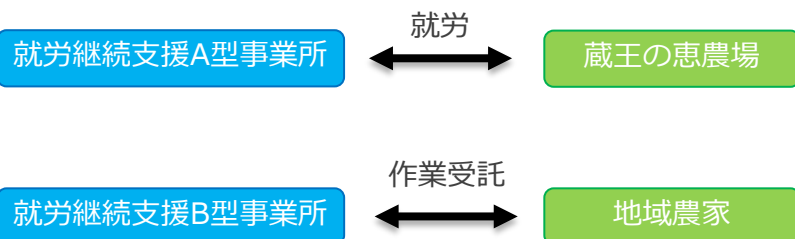
さくらんぼ農家の作業受託



県外中学の農業研修旅行

## 体制図

### 有限会社内外ファーム



## 取組の成果

- 高品質野菜の安定した生産・提供による信頼から、周辺農家からの耕作依頼や市内の農産物加工場からの原料生産依頼が増加し、利用者のモチベーション向上に繋がっている。
- 積極的に農作業を受託し、農作業に従事した障害者の延べ数は、2倍以上に増加（平成30年度 1,642名から、令和3年度 3,531名（県全体の29.5%））。11軒の農業者から作業委託があるなど、障害者の自立に貢献。

所在地▶山形県山形市小白川町5-13-24

連絡先▶TEL：023-674-9111 E-mail：syamada@naigaifarm.jp

ウェブサイト▶<http://www.naigaifarm.jp>

# 【取組のプロセス】

平成18年

きっかけ

農業を営む中で、就業先を探している障害者支援施設と協議する機会があり、じゃがいもの収穫・選別作業を2年間実施してもらった結果、障害者の就労が可能と判断したことから農福連携の取組を開始

## 有限会社内外ファームを設立

- 平成18年4月、有限会社内外ファームを設立。「お客様に美味しい野菜を、安全、安心にお届けする」を目標に掲げ、標高600mに「蔵王の恵農場」整備し、高原野菜の栽培を開始。
- 障害者にじゃがいもの収穫、選別作業に2年間従事してもらった結果、障害者の就労が十分可能であると実感。
- 平成21年8月より障害者の雇用を開始。



障害者施設が生産したふると納税返礼商品

## 就労継続支援A型事業所を設立

- 平成26年4月、『働く誇り』『食づくりの楽しみ』『届ける喜び』を理念に、自然豊かな環境において野菜作りを行うことで、障害者の自立を推進。
- 近年では周辺農家からの耕作依頼や市内の農産物加工工場から原料生産依頼を受けるほど技術が向上。



大豆農家への除草作業支援

## 就労継続支援B型事業所を設立

- 安定した生活を送るためのリズムやスキルを身につけて、就労に向けた様々な作業を経験することで、働くことに自信が持てるよう積極的に推進。
- 安定した農作業の増加により、利用者の賃金向上を実現。



養鶏業者への支援

平成28年

## 共生社会の実現を目指して！

- 農業生産だけに特化した農業経営から、地域全体から支えられ支えることができる新たな農業形態を目指す。
- 障害者が、生涯の職業として活躍できる農業経営を目指す。
- 地域各所で行われているマルシェに積極的に出店し、農福連携の普及啓発を推進。



マルシェへの出店

今後の  
展望

降雪地帯の中間農業地域における農業の安定継続には、高付加価値商品づくりが不可欠

地域全体が高齢化や人口減少により農業就業者の確保が困難

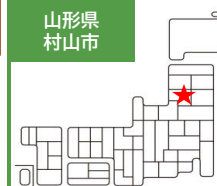
労働集約型の畑作農業を継続的に実施

山形県農福連携推進センターのマッチング支援を活用

除草剤を使用せず無化学肥料で食用バラを栽培し、施設外就労を活用して生産規模を拡大し、花きとして初となるノウフクJASを取得。農福連携に取り組む食用バラ農家の育成を実施。

農業経営体

山形県  
村山市



きっかけ

R4年

山形県での就農直後に、バラの作業時期と地域特産のさくらんぼの収穫時期が被り、労働力の確保が困難に。市の紹介で施設外就労の受け入れを始めたところ、障害者の丁寧な仕事を目の当たりにし、本格的な受け入れを決め、加工作業の依頼を開始。

人を耕す

- 障害者のスキルアップにより、工賃が時給換算で前年比10%増になり、就労継続支援B型事業所への平均月間支払額も114,951円に上昇。
- スマート農業等の機械操作や、安全管理の講習会を実施し、障害者が機械作業で活躍。作業ごとにリーダーが出るなど技術が向上。

地域を耕す

- 地域農業の担い手として研修会に登壇し、施設外就労の受け入れにより規模拡大したことを発信。
- 特別支援学校からの実習生の受け入れを実施。
- 村山市で農福連携が広がり、障害者の受け入れが進む。

未来を耕す

- 除草剤を使用せず無化学肥料での食用バラの栽培を開始。施設外就労により、障害者が90%以上の農作業を担い、経営が安定。
- 食用バラ農家の育成にも力を入れており、循環型無農薬露地栽培・農福連携・6次産業化・スマート農業による経営モデルを全国へ発信。

## 基本情報

設立:H23年/農福連携取組開始:R4年

取得認証等:ノウフクJAS

取組

成果

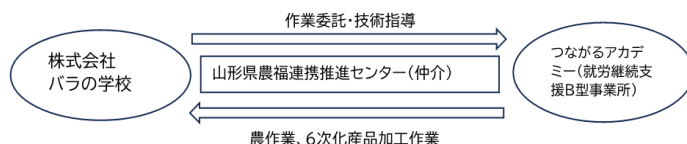
## 概要

主力商品  
(農作物)バラ  
(加工品)食用バラ加工品

特徴的な取組  
有機農業、スマート農業

概要

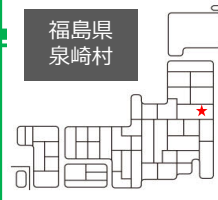
体制図



TEL:090-1373-3200/Mail:t.nakai@baranogakkou.co.jp

| 事業所への年間支払額             | 施設外就労年間のべ人数          | 農業収入                          | 農地面積                |
|------------------------|----------------------|-------------------------------|---------------------|
| 2千円(R4)<br>→ 530千円(R5) | 26人(R元)<br>→728人(R5) | 7,400千円(R元)<br>→ 47,240千円(R5) | 16a(R元)<br>→50a(R5) |

- 花きとして全国初となるノウフクJAS取得によりエシカル消費を意識する購買者に訴求し、収益が改善。
- メディアで取り上げられたことで、高級レストランなどからの引き合いが増え、販路が急速に拡大。
- 全国から視察が増加し、「農福連携×食用バラ」の認知が広がったほか、農福連携による食用バラの栽培を障害者就労施設5社が開始。



精神障害を中心とする施設利用者が、養鶏のほか野菜栽培、加工、農産物直売所の運営などを通年で実施することで、農業を職業訓練の場、働く場として活用し、障害者の一般就労へ向けた訓練や支援に取り組む。

## 基本情報

- 所在地：福島県泉崎村
- 団体名：社会福祉法人 こころん
- 選定表彰：
  - ・平成29年 ディスカバー農山漁村の宝 アクティブ賞（主催：農林水産省）
  - ・平成29年 ふくしま地産地消大賞（主催：福島県）
  - ・令和2年 ふるさとづくり大賞（主催：総務省）
  - ・令和2年 ノウフク・アワード2020優秀賞（主催：農福連携等応援コンソーシアム）
- 主力商品：鶏卵（ここたま）、たまねぎ、菊芋、さやえんどう、オクラ etc.
- 取得認証等：JGAP

## 取組の概要

- 利用者の就労の場として農産物直売所を運営する中で、離農者が増加していることを知り、荒廃農地や高齢のために継続が困難となった養鶏場を引継ぎ、野菜や水稻の栽培、養鶏を実施。
- 平飼いによるストレスの少ない鶏が産む、殻が固く白身の盛り上がった新鮮卵「ここたま」を販売。県内外のマルシェに参加し、販路開拓・拡大に取り組む。
- ①こころんファーム（農業、養鶏）②こころん工房（スイーツ）③こころや（直売所）④C o r o y a c a r（移動販売）など生産・加工・販売までを、こころんの就労支援事業（6次産業化）として展開。
- 幼稚園児等を農業体験で受け入れ、障害者と触れ合いながら、農作業の楽しさや大変さを体験する機会を提供。また、買い物に困っている高齢者の住む団地等に、移動販売を実施。



直売所・カフェこころや



平飼い養鶏場

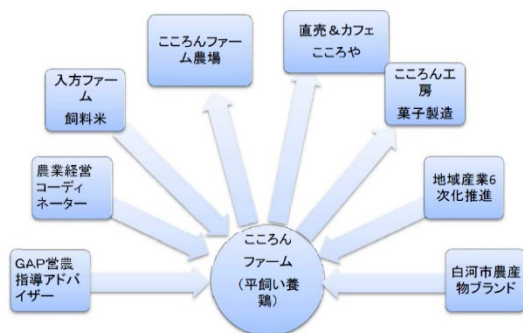


畑で活躍する利用者



移動販売

## 体制図



## 取組の成果

- 施設利用者は、農業を通して体力や忍耐力が身についたほか、地域の人々と触れ合う機会が多くなることで家族間のトラブルが減少し、明るさを戻す。また、直売所の売上げの増加（JGAP取得により、その食材で作る直売所・カフェのランチが好評）に伴い、利用者の所得も向上。
- 農産物の売上 1,100万円（平成27年）→ 2,183万円（令和3年）→ 2,227万円（令和4年）
- 直売所の売上 5,779万円（平成27年）→ 6,852万円（令和3年）→ 6,323万円（令和4年）

所在地 ▶ 福島県西白河郡泉崎村大字泉崎字下根岸 9

連絡先 ▶ TEL : 0248-54-1115 E-mail : izumizaki@cocoron.or.jp

ウェブサイト ▶ <http://www.cocoron.or.jp>

# 【取組のプロセス】

平成16年

## きっかけ

利用者の一日の生活のリズムを整えることや、食べることの大切さを再認識する必要があると考え、農業や直売所など、食に関する事業を実施

- ・ NPO法人「こころネットワーク県南」を設立【平成16年～】
- ・ 「生活支援センターこころん」を開設【平成16年～】
- ・ 障害者自立支援法の就労支援事業を開始【平成18年～】

平成18年



### 「直売所・カフェ こころや」を開所

- 野菜や加工品の安心や美味しさにこだわった同直売所は地元のこだわりのお店として定着。
- 地域の農家や加工品の生産者、取引業者、消費者など、多くの地域の人々とのつながりが増え、障害者が自然な形で地域に参加できる直売所となった。

平成22年

### こころんファーム開始

- 直売所を運営する中で、地域で離農者が増加していることを知り、荒廃農地を借り受け、無農薬、無化学肥料栽培の自然循環農業を開始。
- 施設外就労として、収穫の終わったトマトハウスの片付けや、果樹園の剪定後の畑の片付け作業などにも従事。



「直売所・カフェこころや」の新鮮な農産物

平成23年

### こころん工房事業開始

- 農場の野菜、卵を活用した6次産業化に取り組む製菓工房として事業を開始。
- ジャージー牛のミルクを生産する牧場と連携するなど、こだわり抜いたお菓子を生産。
- 平成23年、NPO法人から社会福祉法人へ移行。



「こころんファーム」自然栽培米

平成30年

### こころんファーム養鶏場「平飼い」へ移行

- 地元の米を中心に遺伝子組み換えでないポストハーベストフリートウモロコシや、牡蠣殻などを自家配合して使用。
- 最新の設備を導入し、自然の中で歩き回れる平飼いを実施することによって、鶏にとって理想的な環境を創出。
- 鶏舎の中にもみ殻やおがくずを撒き、自然発酵させることで、完全堆肥として使用。令和元年にJGAP取得。



「こころんファーム」ここたま燻製卵（くんたま）

今後の展望

### 農福連携は社会の資源

- 福祉（障害者福祉）＝ 障害者の生活上の課題を解決していくことの支援。
- 農場における米の品質向上と生産性の向上。
- 新しい6次産業化商品の開発。
- 料理教室などのワークショップの開催。
- 利用者の自立支援、地元経済の活性化。

店舗経営を模索

高齢化の進む団地や仮設住宅などへの移動販売を実施

企業と連携し商品の開発と販売

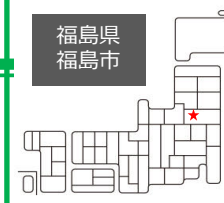
6次産業化商品の推進

平成29年農山漁村振興交付金を活用し養鶏場等のハード整備

平成30年 JGAP(農産物)を取得

令和元年 JGAP(畜産)を取得

農福連携の広がり新しい地域コミュニティづくり



農業体験を通じて、「将来の職業選択肢の幅を広げるための農業の魅力発信」や「農業体験という校外活動を通して食の大切さや流通などを総合的に学習するとともに、生徒の新たな可能性を広げる」ことを目的として、学校と農業法人・JA福島中央会が連携して農業体験を実施。

### 基本情報

- 所在地：福島県福島市
- 団体名：福島県立大笹生支援学校
- 選定表彰：ノウフク・アワード2021  
チャレンジ賞
- 主力商品：長ネギ、長ナス
- 取得認証等：－



収穫するナスの大きさの説明

### 取組の概要

- JA福島中央会より、「将来の職業選択肢に農業も入れてもらうための農作業体験会に協力してほしい」との依頼があり、令和2年度より活動を開始（令和5年度で4年目）。
- 農作業体験会で生徒が収穫、包装した長ねぎとなすの一部をJAふくしま未来農産物直売所で販売を実施。
- 農業高校の生徒が来校し、「クリーン活動班（主に清掃の仕方を学習する作業学習班）」の生徒と共に農業高校の生徒が栽培した花苗を校内へ植える活動を実施。また、「クリーン活動班」が農業高校や地域の福祉事業所へ出向いて、清掃活動を実施するなど、地域との交流を積極的に図っている。

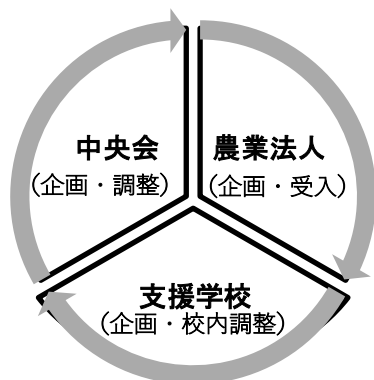


野菜結束機の体験



スコップを使っての  
ネギの収穫

### 体制図



### 取組の成果

- 野菜の収穫から調製作業を体験することを通し、生徒の農業への興味・関心が高まるとともに、卒業後に農作業を主に実施している福祉事業所の利用を希望している生徒にとって事前に農業を知る機会となっている。
- 体験会では、JA職員や農業者と生徒がやりとりする場を多く設定することで、特別支援学校の生徒の能力や障害への理解を深めてもらうことにつながっている。

所在地 ▶ 福島県福島市大笹生字廻板山1 8 2 番地の2  
 連絡先 ▶ TEL：024-558-8710 E-mail：ohzasou-sh@fcs.ed.jp  
 ウェブサイト ▶ <https://ohzasou-sh.fcs.ed.jp>

# 【取組のプロセス】

平成13年

きっかけ

原発事故等の影響により、農業体験が難しい状況となっていたが、地元JAの提案により農業体験が再開

平成23年  
3月

原発事故により屋外での栽培が不可能

## 原発事故により、屋外での農作物の栽培ができない

- 学習活動の中で、じゃがいもやさつまいも、大根、白菜の栽培を実施していたが、東日本大震災による原発事故の影響により、屋外での農作物の栽培ができなくなった。
- 農作業は児童生徒にとって必要な学習と考え、土の入れ替えや収穫物の放射性物質検査などを行いながら、狭い畑でじゃがいもの栽培などを行っていた。



バッグシーラーの使い方の説明

令和2年  
4月

JA福島中央会より農作業体験会への協力依頼

## JA福島中央会から農作業体験会に対する協力依頼

- JA福島中央会から、「将来の職業選択肢に農業も入れてもらうための農作業体験会に協力してもらえないか」との依頼があり、農業体験復活の足掛かりとして事業を受託し、長ネギの収穫と収穫後の調製作業を実施。



地域施設の清掃作業

令和3年  
4月

農作業体験会で生徒が収穫・包装した長ネギ・茄子を直売所で販売

## 農業高校とクリーン活動班の交流

- 農作業体験会で生徒が収穫・包装した長ネギと茄子をJAふくしま未来農産物直売所で販売。
- 農業高校の生徒が来校し、クリーン活動班（主に清掃の仕方を学習する作業学習班）の生徒と共に、農業高校の生徒が育てた花苗を校地内へ植える活動を実施。
- クリーン活動班が農業高校や地域の福祉サービス事業所等へ出向き、清掃を行い学習の成果を実践するなどの交流を実施。



花植えを通しての農業高校との交流学習

今後の  
展望

## 特別支援学校生徒の農業への関心や周辺からの理解の促進

- 農作業体験を通して、学んだことを他の生徒に伝えることにより、農業への興味や関心を高めることにつなげる。また、進路選択の幅や社会に対する視野を広げることにつなげる。
- 農業関係者に、生徒が農作業に取り組む様子を見てもらうことで、特別支援学校の生徒の実態や作業能力等についての理解促進を図る。